

2001. 11. 25

VOL. 11



今年度、自給ネットワーク会員から募ったモニターを対象に行っている「小麦トラストシミュレーション」。

10月18日、第1回目の製品発送後、スタッフの元には、モニターのみなさんからの「美味しかった！」の聲が。

発行 北海道食の自給ネットワーク

札幌市東区北15条東18丁目2-17 ㈲ワードエム内

TEL (090)2818-5502 FAX(011)789-8890

ホームページアドレス <http://www.kirari.com/wm/jk-Site/>

一人の生産者から見た、国内のBSE (牛脑海綿状症・通称、狂牛病)事件

宗谷岬肉牛牧場長 氏本 長一

はじめに

毎年十月は、取引先である、関西の二つの生協の迎春商品学習会に産直牛肉「宗谷黒牛」の近況報告に張り付くのですが、BSE事件のおかげ?で、今年はその約三週間にわたりました。

この間、昼は組合員向け学習会、夜は生協職員の自主研修会と、回数、内容とも今まで以上に密度が濃く、産地で直接生産作業に従事しているだけでは体験できないたくさんの生の声を聞き、意見交換もすることができました。

その体験も踏まえて、BSE事件によって改めて浮き彫りになった、国内の生産者側と消費者側、食品業

界それぞれの抱える問題を、私なりにご報告したいと思います。

一、乳、肉牛への肉骨粉を使用していた酪、肉牛農家

英国でのBSE発生を契機として、以前から牛を原料とした肉骨粉を含む飼料は、牛類への使用が禁止されていたにもかかわらず、少数とはいえ給与していた酪、肉農家が国内にいた事実は、消費者無視の「食」の生産現場であったということであり、生産者の一人として言い訳のしようがありません。

過失、故意に関わらず、肉骨粉を含む飼料を生産者に供給した業者、それを使用した生産者の存在は、「食」に携わるという意識が全く欠けており、国内農業を応援してくれている市民の信頼を大きく裏切っています。そのような業者や生産者は、日頃から誠実に従事している多くの生産者の、牛飼いととしての誇りをも踏みにじっていることは到底気づかないでしょう。

生産物の価格支持や、そのための流通制度など国の制度自体が、時には生産者に消費者の存在を意識させにくくしている場合もありますが、結局のところ、生産者ひとりひとりが、「食」に携わるプライドを持つことが、この問題に対する解決策だと思っています。私の考えるその方策は後段で触れます。

二、風評におびえて自己防衛にはしる消費者

豊富な情報と食材に囲まれた社会のなかでは、本来多くの市民が、有益で十分な情報を得て、豊かな食生活を享受できるはずですが、しかし、今回のBSE事件では、逆に溢れる情報を処理しきれず、かえってその不安から、自己防衛にまわり、牛肉や牛加工品の極端な買い控えや、関連商品の拒絶という負の面をさらけ出しました。

また、農水省や厚労省のコメント、教育委員会による、学校給食での牛肉や加工品の使用停止などの措置が、

消費者の不安感を増幅させてしまっ
たともいえます。

学校給食に関していえば、父兄の不安感に速やかに対応したことを評価する意見と、日頃から食材の素性を十分把握していれば停止する必要はなく、安易な、父兄への迎合はかえって風評を増幅させたと批判する意見と、両極の立場があります。

過剰なまでの自己防衛（個人リスクの回避）行動は、安全な牛肉や肉骨粉までも税金による処理、関連業種の打撃救済、不安沈静化対策など、社会全体のコスト増として、結局はその人自身に跳ね返ってくるだけでなく、風評に踊らされず冷静な行動をとった市民にまでその負担を強いる不合理さが生じてしまいます。

三、必死で自社製品の安全宣言をする企業、その広告媒体としてのメディア

多くの食品関連企業や外食チェーンは、米国産か豪州産の輸入肉しか使っていないことを広告すること

自社製品の安全性を競って訴えています。

しかもそのコメント内容の大半が、輸入肉の使用理由は消費者の健康のためであるかのような表現を装っています。

従来から狂牛病などの発生を予測しての予防行動であればその見識に敬意を表しますが、単に経済的収益性の理由からではないでしょうか。

これらの広告を見て、はじめてその企業の使用肉が全量輸入肉だったことを知った市民も多いのではないのでしょうか。どうして、消費者の健康のためであるなら、日頃からそのことを強調してこなかったのでしょうか。

結局は、企業のモラルや経営姿勢が問われ、ここでも消費者軽視の姿勢が浮き彫りになっているようです。

また皮肉にも、これら企業広告の媒体としての多くのメディアは、BSE関連報道で、「関係者のコメントは本当か？ 素直に言い分を信じて

いいのか。」式論調で消費者の警戒心を煽っていることです。（企業の安全宣言も素直に信じられない？）

四、「安全」と「安心」の違い

各種検査を積み上げて、食品の安全レベルを限りなく上げることは可能ですが、その検査結果を信用するかどうかも含め、一〇〇%の完全な安全は誰も与えられません。

私は、消費者が「食」に求めるのは「安心（心が安まる）」であり、安心には信頼・信用という要素が不可欠だと考えています。そして、その信頼・信用は、自分が相手（外部）に持続的に働きかけないかぎり、相手から与えてもらっただけでは決して獲得できない感情ではないでしょうか。

このBSE事件の影響による牛肉販売の動向をみても、日常的に直面販売している百貨店や専門店、さらには、生産地とも対話ができる生協など、コミュニケーションを重視した業態の落ち込みが少ないことが、

それを証明しているように思います。日頃から、価格の安さだけでなくこちらのスーパ―を渡り歩く消費者には、安心を手に入れることは難しく、今回のような事件が発生すると、その不安も大きいでしょう。

五、「安心」な食料を得るために

私が牧場長をしている宗谷岬肉牛牧場を例にとると、ここの宗谷黒牛は、全農による「安心システム」という産地・産品認証の第一号産品です。

この認証制度は、安心な食料について、安全検査で埋めきれない最後の部分を、消費者との信頼関係で完結させるという意味で、名称を「安心システム」としたのです。

最初の生産基準（飼料原料とその調達から、肉牛の飼育方法、肉牛の流通、処理加工まで）作成時から生協と流通業者が参画することで、消費者と流通業者の宗谷黒牛への関心を高めます。生産関連情報の開示についての権利と義務をそれぞれが常

に共有して透明性を高め、あわせて宗谷黒牛の利用に責任を分担することで、緊張感をもった信頼関係の構築をめざして、私はこのシステムを進化版産直事業といっています。

生協に限らず、多様な形の生産・消費・流通の連帯（一種の産直事業）は、むしろ二十一世紀にますます必要性が高まると考えます。

このような連帯システムは、農協組織や有機認証団体、生協などがコーディネートすることで、多様性を増し、より多くの生産者や消費者が参画できることとなります。

六、おわりに

産地に関心を持たない消費者と、見られていないことで緊張感を欠く生産者。不明朗な飼料原料や家畜の流通分野。相互の信頼関係が無いなかでの「食」への自信のなさが、今回のBSE事件のもう一つの側面ではないでしょうか。

賢い消費者はしっかりと産地に目を向けることで、真剣な生産者を育

て、真剣な生産者は健康で美味しい生産物をつくり、結果として、賢い消費者が健康で美味しい生産物を安心して利用できるのです。

多様な形で、消費者と生産者と流通業者が日常的に結びつき、互いに育てあう関係のなかから、生産者の作る喜びと消費者の食べる喜びを共有することが、牛歩のように見えても、市民レベルでの、しかし、国の何百億円の補助金よりも効果的な、国内の食料自給率向上の道だというのが私の結論です。

氏本 長一氏プロフィール

一九五十年山口県生まれ

帯広畜産大学卒業

一九九五年から宗谷岬肉牛牧場長、
(社)宗谷畜産開発公社常勤理事も務める

リレートーク

こうも化学物質に遺伝子組み換え、伝染病に抗生物質耐性菌が世の中に蔓延していると、健康ブームがさらに過熱するという不健康さが大手を振って歩くのもうなずける。金銭的にそう自由でない私は、ゴマカシを混ぜつつなんとかやってるといのが正直なところ。

ちよつと前に聞いたのだが、縄文時代の人たちは目の前の海で貝などを採り、何日かに一度獣を狩れば後は結構ひまだったそうだ。(忙しくなったのは農耕を始めてから)その暇なときに手の込んだ黒曜石などの道具を作ったという。なんて羨ましい。でも平均寿命は三十五才。私はもう死んでいるか、おとなになつていなかったかも。どの時代に生まれても良い事も悪い事もあり、比べようもないけれど、「食べる」スタイルは「生きる」スタイルそのものではないだろうか。シンプルでも満足できれば充分だと言えるだろう。

グルメブームも手伝って「あれもこれも何もかも」がしばらく前からの日本だと思うが、そりゃあおいしいパンは大好きだけど、フランスから空輸されているのパンとも思えぬ高価な値段で並んだりするのはどう考えてもおかしい。

どこそこの何がおいしいという関心と、最低でも同じ

スローでいこう
～食べ方も 生き方も～
イラストレーター・主婦 伊藤 美弥子

位に農産物の自給率に関心を持つべきではないだろうか。はるばる海の彼方から運ばれてきたブロッコリーがそんなに新鮮そうで安いのは何故？ 反対に某国皇室のように自家農園のものしか食べませんというのもわかるような、ズルいような。落ち着いて自分の足元をきちんとして、バランス良く行けたらいいのに…。

毎年気候は「異常」。いつまでが普通だったんだっけと考えてしまいが、この夏我家の木苺はよく実った。はちみつで煮てシロップにし、甘くない炭酸水で割ったら赤いソーダになる。もうそんな飲み物が欲しい齡でなくなっても、夏の赤いソーダは見ているだけで嬉しい(ジュースじゃないところがポイントです)。自動販売機の前でどれにするか迷うのも子供は楽しいのだろうけれど、子犬のような子供たちが手に手に木苺を摘みできた方、いそいそと冷蔵庫から炭酸を取り出したりする方がスローでいい感じだ。何に対してもこんな余裕が持てたら良いのに。でも私はしよつちゅうナマケモノだったり鬼になったり…。

この夏、パートの仕事をやめて、いくつかのものを失ったが、忙しい日々のうちに忘れていたことを思い出した。大切なのはほんの少し手をかける時間と心の余裕。自分で自分を追い詰めたりしないで「落ち着いてやれば大丈夫」だつて励ますことも。

「トラスト畑見学・交流会」報告

プロジェクトスタッフ 清水 のり子

八月二十五日、夏の終わりのやさしい日差しを浴びて、スタッフを含め十三名がトラスト畑見学と交流会に参加しました。

食の自給ネットワーク代表の松下博樹氏経営する農場では緑一面に広がる大豆畑に感動し、松下氏から大豆の生育状況の説明を聞き、これから晩秋まで一粒の大豆にするまで大事に目配り、気配り、気象条件に左右されながら収穫までの生産者の惜しみない努力によって、美味しい道産大豆ができることを直接感じることが出来ました。

そして秋の大豆の料理講習会に、この大地で育った大豆を使える楽しみがあり、生産した大豆が形を変えているいろいろな食品となっていく喜びを期待しながら、参加者と大豆畑を背景に記念写真を撮りました。

そのあと昼食の場所である町内会館へと移動しました。途中、親子で参加された虫博士の川村平太君は、道端の昆虫に夢中になり、カタツムリの種類の説明をスタッフにしてくれました。昼食は大豆を使った大豆ご飯や採れたて野菜を使った大豆マヨネーズサラダ、焼肉に舌鼓を打ち、と

くに大豆ごはんがとても好評でした。

食事のあとは参加者の自己紹介をして、生産者である松下さんと共に北海道の農業の現状や食文化の話へと会話が弾みました。参加された金子さんから、「さまざまな食を取り巻く現状に、もっと多くの方が目を向けていく事はとても大切だと思います。」とコメントをいただきました。

和気あいあいしているうちに、あつという間に時間が過ぎ、名残惜しみながら現地解散になりましたが、太陽の下で郊外のきれいな空気と遺伝子組み換えの無い大豆料理を食べてパワーがつき、健康になったような気がしました。

小麦プロジェクト

「小麦トラスト・シミュレーション」進捗状況報告

プロジェクトリーダー 長尾 道子

七月後半から全道各地で小麦の刈り取りが始まりました。今年には春・秋小麦ともに平成に入ってから一番収量が確保できた年となりましたが、一部品質面では苦慮された地域もあったようです。そのような状況を簡単にまとめたものと、参加メーカーの紹介をもとに「ファームレター」を制作、八月下旬に小麦トラストモニターはじめ関係者へ発送しました。

そして秋播き小麦の種まきが始まる九月十三日、札幌市女性センターにて、トラスト製品の選定&試食ならびに意見交換会を行いました。とかく顔の見えにくいとされる小麦だからこそ、生産者・農協・製粉会社・加工メーカー・モニターが一堂に会して意見交換を行う機会を設け、親睦を深めることを最大の目的としていただけに、スタッフ一同、この日をとっても楽しみに、ちよつと不安(!?)にしていました。が、そんな不安も何のその、有意義な一日となったのです。

まず午前中は、全員で十月から発送予定の製品(パン、ラーメン、手延べうどんとそうめん、生パスタ、ミルクジャム)を試食、またモニターには菓子パン・デニッシュパン、ラーメンのたれの選定もお願いしました。各メーカーさんは、調理台で自社製品を美味しく調理しながら、製法やこだわりなどへの質問にも答えるなど大忙し。他の人たちは食しながら質問しながらと、和気あいあいとした時間を過ごしていました。

おなかも満たされた午後は小麦についての意見交換会。みんなウトウトするかと思いきや活発な話し合いとなりました。小麦は原麦から粉、そして多様な加工品へと姿形が変化していくだけに、やはりそれぞれ立場から考え方の違いが露

に出されました。ですが、皆で話し合うことよって互いに歩み寄ること、相手のことを理解することが可能だと確信、これからのトラスト活動に一筋の光を見出した貴重な時間となりました。

そして十月十八日に第一回目の製品発送が終了しました。箱には製品のほか、畑の状況報告や自給率についての論文、製品紹介など小麦にまつわる情報を掲載したスタッフ作成の小冊子「小麦通信」と製品アンケートを同封しました。これらは、このトラストは単に製品を食べるだけでなく、食への、そして農業への問題意識を持つためのものであることを常に意識してもらうため、また来年本格的にスタートする小麦トラストの企画改善のため、一月まで製品発送の度に同封する予定です。

また、十一月二十七日にはトラストモニター企画の第三回目として、トラスト製品のパンを作っていただいているれもんベーカーリーへ見学会を実施、小麦粉からパンになるまでの工程を見たり、製法や粉の成分などパン職人からみた小麦の話をつたりする予定です。(焼き立てのパンも用意！)

プロジェクトからの報告

有珠郡壮瞥町。昭和新高山がすぐ目の前にそびえる見晴らしの良い高台に高野さん夫妻の経営する福祉農場「たつかいむ」はある。十五年前新規就農し、知的障害者を雇用するこの農場を開設、今年九月に設立された「北海道有機農業協同組合」の理事も務める高野律雄さんにお話しをうかがった。

「農場「たつかいむ」について」

話 こん 人 の 紹介 さん 律 雄 高 野 壮 瞥 町 警 署

— どうして福祉農場を始めようと思ったのですか。また、開設までの経過も教えてください。—
私は以前東京都世田谷区にある福祉施設で、児童相談所のセラピストをしていました。でもそこで感じたのは、知的障害者を持つ子供達が成長した時、生き生きと働き生活できる場所が無いという事でした。妻も福祉関係の仕事をしていましたから、二人でそういう場所を作りたいと思いました。人間の基本は食べる事ですから↓農業↓安心出来てしかも美味しいもの↓有機農業となり、有機農場に決めました。土地を探しながら農家で研修し、妻の実家のある北海道に渡り、ここに開設したのが一九八六年です。

— 御自身も慣れない土地での新規就農。しかも知的障害者を持つ人達を雇用するとなるとたいへんではなかったですか—

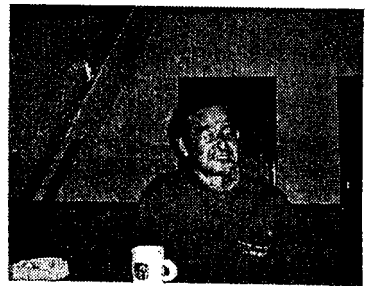
農場のパンフレットを作り地元配りました。こちらから情報を開示しないと閉鎖的になるし、地元の人々に支えられる農場にしなければと、開所式の時、町長や議員など、地元の名士の人達に「たつかいむを支える会」の会員になっても

らいました。廻りの人達は好意的に思えたり、自分で買った自分の土地でやるのだから問題は無いです。後で実は隣のおばあちゃんや、障害者が来るからもう怖くて一人で外は歩けないと言っていたなどという話を聞きビックリ。最初に聞かないで良かったと。(笑)。農場を始めてからは、秋の収穫の時期、地元

の農家にうちの障害者の子が手伝いに行き、一緒に働いてお茶を飲んだりして、わかってもらえるようにしました。

農場は最初養鶏から始めました。農協出荷を一年で止め、あとはお金が無かったので進学塾の先生をしながら、自分で営業をしました。室蘭生協、学校給食センター、養護学校、友の会などと契約。食の安全が意識され始めた頃で、室蘭生協で卵の需要が伸び、お陰で農場ではどんどん鶏の数を増やし、卵の出荷量も増えました。

その養鶏場も全部自分達で作ったんですよ。住居の改装も自分達でしました。湧き水を引いたりして、若かったから楽しかつたなあ(笑)。苦労だと思わなかった。うちで働く障害者の人達と一緒にやっただけですが、素晴らしい体験でした。この子達はこんな事も出来るのかと、目を見張る思いでした。



プロフィール
高野律雄
1953年、静岡県生まれ
明治大学文学部卒業
妻、子供2人の4人家族
北海道有珠郡壮瞥町字立香 156-2

—今の農場の様子と、これからの夢を教えてください。

面積は畑6ha、養鶏場2haの合わせて8ha。鶏は、成鶏幼鶏合わせて三千羽で、自然養鶏では道内最大の規模です。畑で作っているのは主に豆類。牡蠣は豆の産地なんですよ。他には、スイートコーン、いちご、カボチャなど作っています。あと、グチヨウが六十五羽。四年まえから飼いはじめ、来年肉を出荷する予定でいます。働いているのは、雇用している障害者の人六名。いずれ雇用したいと思ひ、今は手伝いをしてもらっている障害者の人四名、スタッフ三名、それにわれわれ夫婦、全部で十五名です。

将来の夢ですか。実は昨年「はばたき五ヶ年計画」というのを立てたんです。今までは障害者の人達の経済的自立を考え、農地法人だけでやってきたのですが、これからは社会福祉法人と農地法人の2つに分け、両方の制度で運営しようかと思っています。畑を広げ、鶏も増やす。今は畑、畜産の一次産業ですが、将来はそれを生かした加工（二次産業）と、農場の景観を生かした店を作り、そこで農場のものを使った食事と加工品の販売（三次産業）をしたいと思っています。つまり六次産業ですね。規模を広げる事により、障害者の雇用の場も広げられるんです。私はノーマライゼーションを定着させたいと思っています。今はまだ障害者は障害者として分けている。将来は健常者も障害者も一緒に、協同組合的に働けたらいいと思っています。

「有機農協と遺伝子組み換え作物」

—高野さんは今年、遺伝子組み換え汚染がされているかもしれない輸入の種子を使わず国内産の種子を探してデントコーンの栽培をされましたが、遺伝子組み換え作物に対するお考

えを聞かせてください。

遺伝子組み換え作物には反対です。私は農業を、自然の循環の中からもらうもの、自然の一部分だと思っています。人間の力で自然を操作するのはいけないと思う。ましてや遺伝子組み換えは、種の壁を越え、自然界ではあり得ない事を人間が作り出しています。それに、たとえば医療分野で治療の為に遺伝子操作をするというのは違ひ、遺伝子組み換え作物は、巨大企業が営利の為に作ったものだからね。

—今年、全国で初めて、北海道で有機農協が設立され、高野さんは理事に就任されました。有機農協に期待される事は何か。—

有機農協が出来たことで、今まで個だった生産者が集まり、発信出来る場が出来た。種子や資材の共同購入で経費も節約出来ます。遺伝子組み換えの問題もありますから、共同で育種なども出来たら良いですね。何より作ったものをただ流通に乗せるだけではなく、これからは生産者が主体的にならなくては。生産者と消費者が直接向き合う事が出来る農協にする事が大切だと思います。



記事 事務局 大熊久美子

写真 事務局 渡辺克也

続 農地を守れ

石狩市市議會議員 羽田 美智代

石狩市は茨戸川と石狩川に囲まれ、札幌市に程近い生振（おやふる）地区という農業地帯があります。今年四月、ここに農地の一時転用の話しがもちあがりました。以前から農業委員会は、札幌市手稲区との界にある樽川地区など、地区よって農地における砂利採取（石狩市の場合は砂）を認めている状況がありました。砂利採取法は「取らせる」法律で規制をすることが難しいといわれています。北海道は今年〇月に改正した「北海道砂利採取計画の認可に関する条例」で対応しています。当市は札幌市から近く、港があり、この砂利を運ぶには好都合の立地条件です。しかし、農地の砂利採取は「埋め戻し」後の問題があとをたちません。その期限が守られないことや埋め戻した土を掘り返すと農地として役に立たない土が入れられ、ほとんど作付け不能状態です。さらに砂利を採取する業者は同一人物が法人名を変え、次々に砂利を採取するという非常に不信を抱かざる得ない状況です。農業委員会は土地の現況の証明を出すところでもあり、「農地」に関して農地法の上では農業委員会の意見の付せる範囲です。

この生振の土地は持ち主が亡くなり、妻が後継でした。妻は高齢のため耕作しておらず、三年前までは農地を貸しておりました。しかし、経済的な事情からこの土地は人手に渡り、仮登記されていきました。今回、石狩市農業委員会が始まって以来のことですが、この農地の一時転用については農地法第五条規定による

許可申請書の知事に対する意見として、四つの意見を付して「不適當」としました。生振地区一帯は優良農地であり、これが許可されると間違いなく他者からも願いが出る事が予想され、不毛の農地になることを防ぐためにも一丸となつて決定を下しました。農業委員会の委員は一人一人、この決定を重く受け止め、事業者から訴えられることも含め真剣でした。しかし、「法制度上、許可基準を満たし、農地法上、許可相当と判断する」との事で北海道の農業会議は、私たちの意見を無視し、会議において、石狩市農業委員会が不適當とした意見まで、説明もされないというお粗末さです。この決定に至るまでは、農業委員会のほか市長部局や地元町内会、改良区など協力の下での意見です。いつもなら私一人が、反対となることが多いのですが、全員の委員がその決定をくだした意味は大きな事であり、それが何の影響もされない扱いを受けたことは農業委員会として、大変な怒りと不信を農業会議に抱きました。結局、砂利採取の観点から道の経済部の「北海道骨材資源対策検討委員会」の審査となりました。この委員会の現地視察には地元元の農業者も大勢が繰り出し、反対の看板設置や意見を述べるなど積極的に行動したこともあり、結論は地下水源に影響を与えるなどの理由により、「不認可」となりました。そのことを受けて、農業の一時転用許可は「不許可」となりました。しかし問題は残されています。北海道の担当者の簡単な判断で「砂利採取は法律の範囲」と慣例から一歩も出ない意識。それをうまく、法律も含め利用する事業者、そして農業の厳しい現実があります。現在、石狩市の農業委員会は小委員会を設置し砂利採取から農地を守る要綱を作成中です。いまだ解決策は見つかりませんが、互いに意識を変え、努力は惜しまないつもりです。

会員からの

メッセージ

「サンドウィッチから見えたこと」

札幌市白石区 笹森 麻紀

自分で野菜を育ててみて初めて分かる
ことがあります。私はトマトとキュウリ
とマヨネーズのサンドウィッチが好き
なのですが、今年は自分で育てた取れた
の野菜で作ってみようと思いました。畑
にキュウリの種を蒔き、トマトの苗を植
えて、まず最初に瑞々しいキュウリが沢
山取れました。その時、トマトはとい
うと、ようやく花が咲き出した位です。で
も、私はトマトとキュウリの組合わせは
当然、「出合いの物」だと信じていたので
両方が同時に実る日を楽しみに待って
いました。結果は…トマトが赤くなる頃、
キュウリは、ほとんど枯れる寸前の有様。
キュウリとトマトの実る時季は一ヶ月以
上のズレがあったのです。たまたま天候
のせいだったのか、これが「イメー
ジ」と現実の差なのか。

とにかく今年には新鮮なトマト&キュウ

リのサンドウィッチは無でした。来年
もまた挑戦するつもりですが、どうもダ
メなような気がします。それでも、トマ
トとキュウリが同時に実るか実らないか
ハッキリするならまったく無意味では無
いと思うのです。

周りには、どう処理して良いか分から
ない程情報が氾濫していますが上辺では
ない根っここの部分の情報は意外と少ない
ような気がします。でも肝心な部分を疎
かにしていると、物事の本質からはずれ
たトンチンカンな行動に陥りやすいと思
うのです。サンドウィッチくらいなら、
なんてことは無いのですけどね。

「身近なものを食べ続けたい」

江別市 木村 匡希

九月に食の自給ネットワークに入会し
ました札幌大学の木村と申します。現在、
大学では農業経済学のゼミに在籍して
います。

さて、私がこの会に入会したのは、身
近にある安全で美味しい物を食べ続けたい
との思いからです。私は北海道出身で
すが、二年ほど東京に住んでいたことが

ありました。東京に住む以前も、北海道
の美味しいものを食べていましたが、そ
れが普通の味だという感覚でいました。
ところが、東京では北海道にいた時のよ
うな美味しいものが食べられず、北海道
の良さを実感しました。北海道に戻った
今、再び地元のものを食べることができ、
うれしく思います。

また、大学二年の時に地域経済をテー
マにしたゼミに在籍していました。そこ
で、私は農業を調査し、農業が命を支え
る重要な産業であることを学びました。
それ以来、「食」を大切に考えるようにな
りました。

最近、食に対する簡便化や価格志向が
強まっています。確かに、時間的・経済
的な面ではメリットになりますが、「お金
さえ出せば食べ物が入る」というよ
うに、食べ物のありがたみがどんどん失
われていくような気がします。

しかし、身近なところに「畑」があれば、
消費者も何らかの作業に携わることがで
きます。そして、生産の苦労を知ること
で、食べ物の大切さがわかります。この
考えが多くの人に広がればと思います。
これからよろしく願います。

遺伝子組み換え作物(食品)に対するアンケート集約

(163人中43人回答) (10/31現在)

	20代	30代	40代	50代	60代以上
賛成	—	—	—	—	1
反対	1	8	11	16	5
どちらとも言えない	—	—	—	—	1

(関心がない、その他は回答なし)

北海道食の自給ネットワークの基本的方針における遺伝子組み換え作物(食品)に対する意識調査を8月の会報10号発行時に全会員の方にお願ひしました。

その結果26.3%の会員から意思表示がありました。(表参照)

反対41

- ・種の原理に反し、自然界への冒洗。
- ・不透明な安全性を唱える企業への不信。
- ・不確かさを後世代へ残す事の不安。
- ・これまでの技術の進歩と比例する環境破壊の現実。
- ・一部の科学者と種子独占を狙う多国籍企業への脅威。etc

賛成1

- ・遺伝子組み換えの技術は実績がある。反対している人は、正しく理解していないから。

どちらともいえない1

- ・安全性の不安はあるが、世界的人口増加などによる安定的な食料生産の必要もある。

今後、アンケートを基に、遺伝子組み換え作物(食品)に対する北海道食の自給ネットワークの基本的考え方を検討し、決定していきたいと思います。

募集しています

会報をご覧になりあなたの感想・情報を FAX・郵送して下さい。

「紹介したい人」

「ユニークな催し企画」

「試して見て調理方法」等ご紹介下さい。

あなたも「空とぶてんとう虫」編集に参加しませんか。カット、写真、もち

ろん投稿大歓迎！

編集後記

二〇〇一年は JAS 法改正から始まり、有機農協の設立、有機農家直売店の開店もあって、身の回りを「有機」がさまざまな形で駆け回っていました。僕の中でそれまでの「有機」は、仕事の枠の中だけのものでしたが、今年はそのを多くの人に伝えるための「有機」。そしてこれからも。僕の役割は生産者と消費者の間に立ち、顔の見える関係を作ること。今年消えていった多くの顔しか見えない関係ではなく。

(渡辺 克也)